

運動制御から身体運動、そして人間愛へ

人間健康学部長・人間健康研究科長 村川治彦

小田伸午先生は、京都大学教授を経て2011年4月に関西大学人間健康学部教授に着任されました。「スポーツと健康」、「スポーツ動作の仕組みと制御」等の講義において、スポーツにおける体と心の使い方に焦点を当て、科学と実践をつなぐ教育を行ってこられました。また2014年からは大学院人間健康研究科教授としてスポーツに関する研究者と高度専門職業人の養成を目指し、大勢の院生の指導に従事してこられました。

先生は、運動制御、バイオメカニクスなどの研究者として国内外の専門誌に数多くの論文(74編)を発表されてきました。特に左右肢の筋力を同時に発揮する時の筋出力制御機構に関する一連の研究成果は日本生理学雑誌に総説として掲載され、高い評価を受けました。1998年3月に京都大学において「筋出力における運動制御機構」の研究で「博士(人間・環境学)」の学位を取得され、その成果は2001年に『身体運動における右と左—筋出力における運動制御のメカニズム』(京都大学学術出版会)として公刊されました。

さらには、身体運動において「意識(主観)と結果(客観)がずれる」「主観と客観のずれ」に着目され、客観的計測だけでは理解できない人間の身体運動の総合的研究へと探求を深めていかれました。その研究の方向性はスポーツ動作の科学的研究とスポーツ実践者の感覚的動作論の対応の探求へと向かい、その成果は『トップアスリートに伝授した勝利を呼び込む身体感覚の磨きかた』(小山田良治との共著)『トップアスリートに伝授した怪我をしない体と心の使いかた』(小山田良治、本屋敷俊介との共著)など現場でスポーツ指導にあたる指導者たちとの共著に結実しました。

また現場のスポーツ指導にも深く関わってこられ、1983年から1990年に日本ラグビー協会強化委員、2007年から2019年まで日本ラグビー学会の副会長を務められました。2008年の北京五輪の際には金メダルに輝いたソフトボールチームに身体動作の指導をされたほか、新聞や雑誌において一流スポーツ選手における体と心の使い方をテーマとしたコラムや記事も数多く掲載されています。

私は学部開設の前年、2009年に文学部身体運動文化専修の先輩方と一緒に初めて小田先生におめにかかりました。当時住んでいたのが同じ茨木市ということもあり、帰途ご一緒させていただいた際に「主観と客観のずれ」について詳しくお話を伺い、とても興奮したのを覚えています。このテーマに関心をもたれたきっかけを伺うと先生は、京都大学に着任され取り組んだラグビー部の指導で理論が実践に結びつかないことに悩まれた「挫折」経験だと仰いました。学問の客観性に引き籠もるのではなく、実践との対話に向かわれた先生の真摯な態度にとっても感動し、先生が関西大学にいらしてくださることに大きな希望を感じたことを昨日のように思い出します。

本学部に着任されて以来、常日頃から先生がスポーツに情熱を傾ける学生たちと身体感覚や身体動作について熱く語り合われる姿に、先生のお人柄と深い人間愛を感じてきました。スポーツ系学

部でありながら運動施設に恵まれないこの人間健康学部が、なんとか離陸し順調に飛行を続けてこられたのは、スポーツを愛する学生たちを暖かく見守り続けてくださったひとえに先生の存在があったからこそです。これまでの先生のご尽力に深く感謝申し上げるとともに、先生から学ばせて頂いたスポーツと人間への深い愛情をこの学部の礎として受け継いでいきたいと思いをします。